

## 校長研修だより22

### 2学期のはじめに “Being”

2021・8・26 重枝 一郎

みなさん、明日から2学期がスタートする。始業式では、「アジャイル」と「マインドセット」の話をするつもりである。生徒に向けての話ではあるが、私の中では先生方へ向けた話という気持ちが強い。私からのメッセージという捉えもできるが、「私もたくさん失敗をする」「私に対して先生方が醸し出してくれている“心理的安全”への感謝」が、実は伝えたいことである。

この2学期は、生徒たちを「他律から自律」へ導く大切な学期になると思う。特に高校年代は「保護者」という言葉の意味合いも変わることを保護者にも認識させたい。義務教育段階では「保護してあげる人」という感じであるが、高校年代は「自律を支援する人」になる。

いつも学校教育は大きく変わっているという話をするが、これまでは「〇〇ができるようになる」という“Doing”を問われていたが、これからは「自分の行動の考え方、つまり自分の在り方、自分はどうありたいか」という“Being”が大事になってくる(1学期末にS1がはじめ問題に取り組んだ際に「ピーニングシート」を活用したのもそういうことになる。また、7月末のオープンスクールでの学校説明でもこの話を話した)。そして、私たち教師の無意識的な“Being”は、生徒に影響していく。これは社会人としての“Doing”のことを言っているのではない。先生方の生き方のようなことを言っている。無意識的な自分自身というのは自分ではなかなかかわからないところもあると思う。しかし、それを見ている生徒はその“Being”に影響されていく。だから生徒の言動を見ておくことが大切である。

また、生徒を他律から自律へ導くためには、私たち大人の言動にもポイントがある。やった方がいいことは、「叱る」「ほめる」「励ます」「育む」である。「叱る」は「怒る」のではなく反省点がある時だけ冷静に伝えることである。そして、よい言動をほめたり、チャレンジを励ましたりすると、さらなるやる気につながる。逆にやらないほうがいいことは、「責める」「怒る」「脅す」「キれる」である。やる気に結びつかないので、当然自律につながらないということである。

やったほうがいいことを押しずにやる。ある日は「叱った」、別の日は「怒った」、これは生徒が混乱し、信頼を失う。また、ただポーっと待っていても「叱る・ほめる・励ます・育む」チャンスはない。声かけが重要になる。いくつかの例をあげてみる。

チャンス対話	○「あなたならどう思う？」○「もう少し聞かせて」 ×「ウザイと感じるような質問の仕方」
6秒ルール	カッとになったら自分が冷静になるまで待つ
プロセス評価	○「がんばったな」(過去) ○「がんばっているな」(現在) ×「がんばってね」(未来は任せる) ○「あなたなら大丈夫」
生徒が先生	○「先生に教えてくれ」(心をひらく)